

野鳥の防除対策に着目した鳥インフルエンザ発生予防の取組

中部家畜保健衛生所

○春名宏昭・西本孝志

高病原性鳥インフルエンザ（以下、HPAI）の発生には、野鳥の関与が大きいとされている。今回、特に野鳥防除対策に着目し、養鶏農場の指導に取り組んだので報告する。

1 取組の概要

1) 野鳥防除対策研修会及びアンケート調査

令和7年9月8日に養鶏関係者を対象に野鳥防除対策の実例紹介として、レーザー照射装置やドローンなど、先端的な防鳥対策機器の研修会を行った。加えて、管内の24農場を対象に、野鳥防除対策等についての意識や取組に関するアンケート調査を実施した。

2) 高リスク農場でのため池対策

管内の24農場について、野鳥が好む環境要素によるHPAI発生リスクを検討した。特にリスクが高いと思われたA農場において、農場付近の2つのため池（T・N）に対し、水抜き及び鳥避けカイトの設置（T）やフロートを活用したテグス設置（N）による対策を実施した。

2 取組結果

1) アンケート調査の結果

回答率は79%（19農場/24農場）であった。防鳥ネットの設置率は100%だが、それ以外の対策は実施率58%に留まった。さらに、31%が対策に興味がないという回答だった。最も多く導入されている対策は、簡易で安価な携帯用レーザー照射装置であった。自動レーザー照射装置のような先端技術への関心は高いものの、費用面や効果への懐疑心が導入の障壁となっていた。その他の対策が実施できない理由として、関係者との調整の困難さがあげられ、農場単独での取組みの難しさが浮き彫りとなった。一方、回答した農場の84%が外部組織に相談したことがなく、相談窓口の設置が課題としてあげられた。

2) ため池対策の効果

10月30日にNのテグス設置が完了し、その数日後からTの水抜きが開始された。追跡調査の結果、いずれの対策においても野鳥飛来数の減少が確認された。水抜きは野鳥の防除効果が最も高いが、ため池管理者との綿密な調整が必要な上、水が抜けるまでに長期間を要するため、実施へのハードルの高さが課題となった。Nでは継続して一定の効果が認められたが、テグスの設置面積が広範囲の場合はコストと労力が大きく、鳥避けカイトは安価で導入しやすいが、効果の範囲や持続性が限定的であった。

3 まとめ

以上のことから、対応可能な野鳥防除対策は、ため池の環境、予算、関係者の理解度に左右され、それぞれの対策の特徴を踏まえた上で実施する必要がある。また、農場へのHPAIウイルスの侵入を防止するためには、農場内の飼養衛生管理はもとより、周辺環境への対策も重要であることから、今後も農場に対し野鳥対策への意識向上や啓発を行うとともに、地域ぐるみによるHPAI予防対策の取組が図られるよう支援したい。